

2012年5月6日

聖書：使徒の働き 2章 42節

タイトル：「初代のクリスチャンたちは『祈る』ことに熱心であった」(その1)

“The Early Christians devoted themselves to the Prayer”(#1)

## 序 論

- 私たちは、ここまでかなりの週にわたって、聖書が記す、即ち、使徒の働き2章42節が、明確に記している初代のクリスチャンたちの生き方、生き様について学んできた。
- 私たちは、この使徒の働き 2章 42節が神の言葉であることを信じている。即ち、それを、ルカの手を通して私たちに与えてくださったのは神様である。
- そこから私たちが言えることは、このことを初代のクリスチャンに可能にしたのは神様であり、その同じ神様は、同じ恵みと祝福をもって、今も私たちにこの生き方を可能にしてくださいとされることである。
- その生き方とは：
  1. 使徒たちの教え、即ち、聖書の教えを守ること、
  2. クリスチャン同志が交わること
  3. パンを裂くこと、即ち、聖餐式を守り、十字架への感謝と信仰を生活の中心にすることであり、
  4. 祈ることであるが、
- 実は、これらは、先週も指摘したように、その人がいわゆる名前だけのクリスチャンでないかぎり、クリスチャンが皆、それぞれ普通にしていることである。
- だから、実は、この初代のクリスチャンの生き方を記す使徒の働き 2章 42節の鍵は、単に彼らが、それらのことをしていたという、即ち、「何をしたか」という What の問題にあるのではない。
- 鍵は、むしろ、そこに用いられている原語の *proskarteleow* という動詞が示すように、彼らが、それらを「如何に」したかという、HOW の問題にあるのである。
- 「proskarteleow」という言葉は、英語のほとんどの訳が *‘they devoted themselves to’* と訳しているように、熱心で、献身的しかも、継続的な行為を示す動詞である。
- 即ち、初代のクリスチャンたちの生き方は、「何をしていた(る)か」については、今のほとんどの聖書を神の言葉と信じるクリスチャンたちとそんなに変わることはなかった。
- しかし、如何にそれをするかという How の問題に根本的な違いがあった。彼らはそれらのことを「熱心に」「献身的に」「専心的に」していた。しかもそれらは一時的なものではなく「継続的」なものであった。
- このような生涯を可能にするのが、彼らがペンテコステの日から受けた「聖霊の満たし」である。
- 今日から2回にわたって、ここ数週間の使徒の働き 2章 42節からの一連の学びの最後として、初代のクリスチャンたちが、「祈ることに熱心で、献身的で、継続的であった」ことを学ぶ。
- 「祈り」が、如何に私たちのクリスチャン生涯において生命的なものであるかは、
  1. 「祈り」が、しばしば、私たちの肉体の生活における「呼吸」に喩えられることから分かる。
    - (1) 一方、聖書の言葉を読み、信じ、従うことは、「食べる」ことに喩えられている。
    - (2) 食べることも重要であるが、数日、否、数十日食べなくても、生きることはできるかもしれない。しかし、呼吸は、ほんの数分でもできなければ生きることはできない。
    - (3) だから、聖書は、「常に、絶えず祈りなさい」Pray without ceasing と言う(Ⅰテサロニケ 5：16)。
  2. 更に、イエス様の、あの有名な言葉を思い出して頂きたい。即ち、「あなたがたが私を選んだのではなく、私があなたがたを選んだのである。そして任命した。それは……。またあなたがたが、私の名によって父に求めるものを父が……。’(ヨハネ 15章 16節)と言われた。
    - (1) 即ち、その前半では、私たちがイエス様を信じて救いにあずかるということは、実は、自分が信じたつもりであるが、そこに、「選び」と呼びたい神様の側の先回りしたお働きがあることがまず記されている。
    - (2) しかし、後半に、そのクリスチャン人生の目的と原動力が記されている。即ち：
      - ▶ クリスチャン人生の目的は、「実を結ぶ」こと(実とは、「品性の実」であり、また、他の方々をイエス様にお導きすると言う「伝道の実」である)。

▶また、そのようなクリスチャン人生の原動力は、「主イエス様の御名によるお祈り」であるとイエス様は言われたのである。

(3)即ち、ここでも、イエス様は、「祈り」をクリスチャン人生の基礎的、基本的、生命的問題として取り上げておられるのである。

3. 更に、「祈り」の重要性は、人生の実際的な面からも明らかである。

(1)「よく祈る人」はより祝福され恵まれた「よい人生」を送ることが、実際的にも証明されている。

(2)その最も典型的な具体例は、「祈りと健康」である。

▶Dr. Harold G. Koenig, Director of Duke University's Center for Spirituality, Theology and Health, says, "Studies have shown prayer can prevent people from getting sick, and when they do get sick, prayer can help them get better faster."

▶しかし、時々、このような祈りの力を、単に「祈りの心理的効果のために過ぎない」と片付けてしまう人がいる。

▶即ち、祈った人が、「神様が必ず直してくださる」と信じ込み、元気が湧いてきて、体内の免疫力、治癒力が増して、病気にならない、或は、病気がよくなるのだと、科学的な説明をして、それは奇跡でも、神様の力のあらわれでもないと言ってしまうのである。

▶しかし、それに対して、そのような Psychosomatic な心理的な効果以上の力が、祈りにはあるという証拠も一杯挙げられている。

▶Kansas City Hospital が一年をかけて行なった膨大な調査によると、心臓に問題があって入院した患者たちが、もし誰かが彼らのために祈っていると、祈られていない患者たちよりも遥か高い率でよくなるという。しかも、ポイントは、この場合、患者本人たちは、誰かに祈られているとか、祈られていないということは知らされていないのである。

●このように、祈りは力があり、クリスチャン人生において不可欠であり、生命的に重要である。

●初代のクリスチャンは、この「祈り」に熱心であり、継続的に専心し、献身的であったと聖書は言う。

●今日と来週の日曜日、私たちは、この初代のクリスチャンの祈りの姿について、彼らが危機的な問題に直面していたときのことを記す使徒の働き 12 章 1-17 節の記事から具体的に学ぶ。鍵の句は、5 節である。(1-17 節全部を読む)

## 本 論

1. この出来事から「祈り」について学ぶ第一のことは、「誰が」祈るのかの問題である。

A. 5 節ではっきりと強制的に言われていることは、「教会」が祈っていたことである。

1. 即ち、「教会は、彼のために神に熱心に祈り続けていた」と強調されている。

2. 初代教会の様子を記す使徒の働きは、この教会の祈りを強調する。

(1)1 章 14 節、(2)2 章 1 節?、(3)2 章 42 節、(4)3 章 1 節、(5)4 章 24-31 節等々。

3. 多くの人は、「祈り」と言うと、すぐに「個人的な」祈りを思い浮かべる。

(1)そして、ともすると、個人的な、隠れた祈りこそが、重要であり、

(2)しばしば、教会の集会でするようなお祈りは、偽善的な祈りの危険もあると思い、二次的な、付け足し的なものと決め込んでいる。

3. しかし、イエスさまは、「教会の祈り」を尊ばれたことに目を留めなければならない。

(1)その良い例が、マタイ 18 章 19-20 節である。即ち、「もし、あなたがたのうち二人が、どんなことでも地上で心を一つにして祈るなら、天におられる私の父はそれをかなえてくださいます。二人でも三人でも、私の名において集まるところには、私ももその中にいるからです」と言われた。

(2)そこでイエス様が強調しておられるのは、複数の人の祈り、即ち、教会の祈りである。

(3)私たち夫婦を導いてくださった牧師はいつも言っていた。「私は、この教会を私と家内と長男の 3 人で始めた。教会は、あなたともう一人いれば、二人からもう始まっているのだ。教会の最小単位は二人だ」と。

(4)即ち、イエス様が、「あなたがたのうち二人が」、或は、「二人でも三人でも私の名において集まる」と言われたとき、それは「教会」を意味しておられたのである。

(5) もし、これに反対する人がいるなら、あえて聞きたい。

● 一体、教会は何人で教会になるのか？

● 明らかに「教会」、即ち原語で「エクレシア」は「召された者の集まり・群れ」という意味だから、一人ではない。

● しかし、それなら、何人までになったら教会なのか、10人？ 20人？ 30人？  
この地上における教団はそれらについて「何人という」規定を作るかもしれない。

● しかし、聖書的には、神の前には、「群れ」の最小単位である「二人」から教会なのである。だから、イエス様は、「二人、三人が私の名によって集まるなら、私もそこにいる」と言われたのである。

● 会衆が、2人であろうと、20人であろうと、200人であろうと、2000人であろうと、20000人であろうと、そこには全く同じ主の臨在があるのである。

(5) イエス様は、イエス様の名の下に集められた複数の人々の群れ、教会が、一つになって祈る祈りをいつも期待し、また一番、値高く値づもっておられるのである。

4. イエス様が、昇天後、弟子たちに期待したことも、そして弟子たちが実行したことも、既に上記で見たように、個人個人でバラバラに祈ることよりも、一緒になって祈ることであった。それが：●使徒 1 章 14 節であり、●2 章 1 節に記されていることである。

B. 教会の祈りが、なぜ、そんなに大切か？

1. それは、他の人と一緒に祈ることによって、特に、信仰の先輩、祈りの先輩から、どのように祈るかを学び、成長することができるからである。

(1) 恐らく弟子達もイエス様からそのようにして祈りを学んだのであろう(ルカ 11 章 1 節)

(2) それは、必ずしも表面的な言葉や言葉使いの問題ではない。

(4) それは、祈りの内容であり、姿勢である。

(5) 祈るとき、そこにしばしば、祈り手の神様と人に対する愛、或は、神様への献身と信頼等が顕われる。それを一緒に祈りながら学ぶのである。

(6) それらは必ずしも、その人の言葉の美しさや、聖書の言葉を巧みに使った流暢なクリスチャン的な表現を超えたものである。

(7) また、声の大きさや、滔々(とうとう)とした祈りの長さには比べられないものである。

(8) 時に、それらは訥々(とつとつ)としたスマートさのない祈りの中にも見られるものである。

(9) いずれにせよ、信仰の仲間や先輩たちと祈ることによって、私たちは祈りについて多くを学ぶことができ、祈りの世界で成長することができるのである。

2. それは、またアカウントビリティ (Accountability) の問題である。

(1) 「じゃ、私も個人で祈っているからね」と言って約束しながら、実際に祈らないことがどのくらいあるか？

● 私にはこのことで本当に申し訳なく、辛い経験と思い出がある：日本での聖書学校時代、同級生の一人に精神的病を抱えている友人がいた。彼は一年目の暮れ、学校がクリスマス前から 2 週間ほどの冬の休暇に入ろうとしていた時、心の病で苦しんでいた。彼は私に簡単にではあったが自分の事情を訴えて「西郷兄弟、休み中も覚えて祈って欲しい」と言った。勿論、即座に「はい」と答えた。しかし、学校から離れて教会に戻った私は、クリスマスの特別伝道集会を始め、数々のクリスマス行事、年末の片付け、整理、新年聖会と呼ばれる年頭の 3 日間朝・昼・晩ともたれる特別集会の準備、その他の奉仕の為に忙殺され、彼のことをすっかり忘れていた。新学期に学校に戻って彼に会った時、彼に開口一番、「西郷兄弟、祈ってくれたか？」と聞かれた。そのとき初めて、彼に祈りを頼まれ、祈ると約束していたことを思い出した。嘘はつきたくないと思い、つらかったが、正直に「ごめん、すっかり忘れていた」と言ったときの彼の顔、姿を忘れることができない。とても悲しい、がっかりした様子で言った。「やっぱり。だから僕はとても苦しい、辛い状態が続いていたんだ」と。彼は、その後、暫くして学校を去り、田舎に戻り、後の知らせでは、自らの命を絶ったのであった。

- 今、その彼の死の責任のことを言っておうとしているのではない。私たちが、「自分で祈る」と言っても、しばしば如何にいい加減なことをしているかを知りたいのである。
- 「自分で祈る」「一人で祈る」という言葉には、しばしばアカウントビリティーが欠如するのである。

- (2) また、一人で祈るとき、しばしば、1回や2回は祈るが、いつの間にかやめてしまっている自分に気がつくことが一杯ある。
- (3) 一人で祈るとき、いろいろな都合が入ってきて、時間的に妨げられ、祈るはずの時間がいつの間にか他の事に使われていることはないだろうか？
- (4) 一人で祈るとき、今日は気分が乗らない、体の調子が悪い、などの理由をつけて祈りをやめてしまうことはないか？
- (5) だから、複数の人で時間を決めて、約束して、一緒に祈る習慣が必要である。「あそこで」、「あの場所で」、「誰々と」必ず祈ると約束して祈ることが必要なのである。
- (6) 私たちは、自分との約束を簡単に破る。しかし、他の人との約束は破りにくい。私たちはお互いに励まし合いながら、注意しながら、祈りをいい加減にしないように「教会の祈り」を捧げていく必要がある。

### 3. また、複数の祈り、教会の祈りは、私たちに自己中心的な信仰から守る。

- (1) 一人で祈っているだけの人の多くは、しばしば、自分と自分の家族、そしてごく親しい友のために祈ることだけで終わっているのではないか？！
- (2) 即ち、「自分と自分の周囲だけ」のある意味で、「利己的」とも言える祈りのフォーカスである。
- (3) しかし、私たちが、二人、三人、更に多くの人々と共に祈るとき、否(いや)が応でも、もっと広い視野で祈るようになる。
- (4) 余り知らない人のために、全く知らない、人間的には無関係な人々のために、世界の果ての人々のために
- (5) 自分の家族のことだけでなく、教会のために祈るようになる。
- (6) 現にここでも、彼らは、まるで自分の家の夫が、父親が危機にさらされているときに、教会の父とも言えるペテロのために、真剣に祈ったのである。
- (7) 自分の教会のためにだけでなく、他の教会のために、全世界の宣教の働きのために、まるで自分の家の繁栄のために祈るように祈る人となるためには、どうしても、祈禱会のようなところで一緒に祈る必要がある。

### 結 論

- 今日(今朝)は、この辺でメッセージを締めくくらなければならない。来週は更に深く、使徒の働き 12章に記されているペテロ救出の出来事から、「祈りに専心していた」初代教会の姿を学びたい。
- 今朝は、特に、複数で祈る、教会で祈ることの重要性、祈禱会の重要性を強調したと言える。
- 出エジプト 17章に、イスラエルの人々がアマレク人たちと戦ったときのことが記されている。聖書は「モーセがイスラエルのために手を挙げて祈っている間はイスラエルが勝ったが、彼が疲れてその祈りの手を下げるとアマレクが優勢となった」と記している。そこで、アロンとホルと言う彼の補助者たちは、一計を案じた。モーセを石の上に座らせ、彼の両側に一人ずつ立ち、一人が彼の右の手を、もう一人が彼の左の手をそれぞれ支え、モーセが祈り続けることを可能にしたとある。
- 私達が勝ち続ける為には、一人ではなく教会として皆で力を合わせて祈り続けることが必要である。
- 今日のテーマにも関連して、皆さんにぜひとも読んで頂きたい本がある。決して新しい本ではないから、既に読んだ人も多いと思うが、その本は、“Fresh Wind, Fresh Fire”(邦訳「神よ、私の心に聖霊の火をともしてください」)である。
- その本の著者は Jim Cymbala であり、ブルックリン・タバナクルの牧師として有名である。閉鎖寸前であったその教会にリバイバルを呼び込んだ彼と彼の教会の Turning Point は、彼がある日曜日朝、礼拝で「これから私は、この教会の礼拝に何人集うかではなく、祈禱会に何人集うかをバロメーターにする教会建設をしていきたい」と宣言したときであった。同じことを私もこの教会に祈る。